

Book Review



エビデンスと解剖に基づいた 臨床歯科麻酔学

岩永 譲・嘉村康彦・田中 毅 編



Reviewer

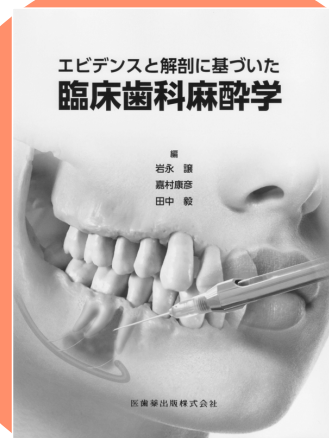
船越栄次 Eiji Funakoshi
(福岡県・船越歯科医院)

A4 判変, 170 頁

カラー

定価(本体 13,000 円+税)

医歯薬出版刊



本書は、アメリカで活躍中の解剖学医で口腔外科医の岩永譲先生、歯周病専門医である田中毅先生、歯内療法専門医である嘉村康彦先生、そして日本で歯科麻酔専門医として教鞭をとられている岸本直隆先生の4人が、構想に3年という歳月をかけ、入念に取り組んで執筆されたものである。そのため、従来の歯科麻酔学の教科書に比べ、より詳細でありながら写真やイラストが多く用いられており、非常にわかりやすい内容になっている。

“顎顔面解剖が導く正しい伝達麻酔法”では、40数年前小生がアメリカの大学の歯周病学教室で教鞭をとっていたころに、歯学部が学生が日々行っていた麻酔を彷彿とさせられた。正しく効果的な麻酔を行うためには、顎顔面解剖を熟知する必要があると思う。もし本書が英訳されたら、アメリカの歯学部でも十分に通用する教科書になるにちがいない。

下顎孔伝達麻酔は、イラストと写真を用い解剖学的な下歯槽神経の走行に基づき説明され、とてもイメージしやすい。さらにエビデンスに基づいたテクニックを詳しく、簡潔に記載されて

いるので、歯学部の学生からベテランの先生に至るまで、勉強になると信じてやまない。

上顎における浸潤麻酔と伝達麻酔とを比較した多数の研究論文を引用し、上顎において、より有用で使用頻度が高いのは浸潤麻酔であると述べられている。ただ一口に上顎の浸潤麻酔と言っても、部位・麻酔薬の量・アドレナリンの量・投与のタイミング・麻酔薬の種類によって期待される効果は異なる。本書では、その最も効果的な麻酔法が詳しく解説されている。

また、麻酔薬は多くの種類があり、特にアメリカで用いられる麻酔薬の種類は日本より多い。日本では、そのなかの限られた種類の麻酔薬が使用可能であるにすぎず、多くの歯科医が1種類あるいは2種類の麻酔薬を、処置時間にかかわらず使用していることが一般的ではないだろうか。しかし、本書では10分の処置ならば、それに合った麻酔効果の短い麻酔薬を選択し、また一方処置時間の長い場合は、麻酔効果の長い麻酔薬を選択することが患者にとって最適であると述べられている。小生はいつも同じ麻酔薬を使用し

ていたため、このことは大いに反省させられた。

表面麻酔については、今までは刺入時の疼痛緩和のみの目的で使用していたが、本書では表面麻酔薬を塗布することによって、粘膜表面の細菌数を減少させる効果があるため、刺入点の感染のリスクを軽減させると述べられている。また表面麻酔薬は、高濃度で血管収縮剤を含んでいないので、血管内に入ると血中濃度が危険なレベルに達するため、使用には注意が必要だとも記載されている。

上記以外にも要点が各章にポイントとして非常にわかりやすくまとめられているので、本書は、麻酔を勉強するための歯学部の学生やすでに臨床経験を積まれている先生方にとっても、今まで知らなかった新しい有益な情報が多く記載され、十分に役立つ本といっても過言ではない。なぜなら、われわれが日常的に遭遇するさまざまな麻酔の問題を、臨床家の立場から同じ目線で、解剖やイラストを用いてわかりやすくその解決法を解説しているからだ。まさに本書は、すばらしい成書である。